

【第2回】市立学びの多様な学校等のあり方に係る有識者等会議

日 時	令和6年12月9日（火）10：00～12：00
場 所	名古屋市教育館 第4・5研修室
参加者 (敬称略)	- 井上 博詞 (所属) 学校法人平島学園こじか幼稚園 園長 元 岐阜市立草潤中学校 校長 - 入江 優子 (所属) 東京学芸大学こどもの学び困難支援センター 准教授 - 武井 敦史 (所属) 静岡大学大学院教育学研究科 教授 - 村中 直人 (所属) 一般社団法人子ども・青少年育成支援協会 代表理事 臨床心理士 公認心理師 - 尾関 利昌 (所属) 名古屋市立小中学校 PTA 協議会 会長 - 山村 伸人 (所属) 名古屋市立富士中学校 校長 - 森 義裕 (所属) 名古屋市立植田北小学校 教諭 - 横井 裕人 (所属) 名古屋市教育委員会事務局 新しい学校づくり推進部長
レジュメ	1 「学校の基本的方向性」について (1) 目指す学校の姿（コンセプト） (2) 目指す学校の姿の実現に向けた学校づくりの視点（機能） 2 その他 諸連絡

記 録

●議事録について

第1回議事録の議事録について、修正箇所がないことを確認

●前回（R6. 10. 29第1回議）いただいたご意見

事務局から資料を基に説明

■委員からのご質問・ご意見

特に無し

1「学校の基本的方向性」について

（1）目指す学校の姿（コンセプト）

■事務局からの説明…資料を基に説明

■委員からのご質問・ご意見

（入江委員）

コンセプトが一番の肝というか柱となるため、最後にふさわしいものを決めることとなるため、本日決めるということではないと理解している。

「ナゴヤ学びのコンパス」を大事にするということは、前回会議でも出てきていてとても大切だと思う。その中で、特に重要だと思うところは、「子ども中心の学び」であり、どの学校園でも大切にしたいことを総称することだと思う。

子ども中心としたときに、何を思い子ども中心とするのか、大切とすべきことは子ども自身が選択することなのか、どう寄り添うのか、など考えるべき点は多くある。

その形は様々だが1つキーワードとなるのは、「ナゴヤ学びのコンパス」20ページにある子どもの自分なりのチャレンジを大事にするという点だと考える。

挑戦時にコンフォートゾーン（安心できる領域）を作りながら、その外側にあるストレッチゾーン（適度な負荷のかかる領域）を広げていき、パニックゾーンに陥らないようにするという図式がわかりやすい。

安心できる領域が強すぎても、学校なので、学んで、チャレンジして、伸びていくため、ちょっとヒヤッとする場面とか、自分にはまだ難しいチャレンジングな内容であったと思っても、また安心して再度挑戦したいと思えるような、行き来できる学校であることがとても大切である。

それが表現されるコンセプトであると、名古屋市のナゴヤ学びのコンパスを受けた学校らしいのではないかと。

安心できる学校であること、副題の楽しみながら挑戦し可能性を広げること、として主題と副題に分かれているが、主題の部分に、伸びていくと

か、自分のキャリアを形成していけるような、副題の趣旨がもう少し入ってもよいのではないか。

(森委員)

前回のまとめにあるように、不登校施策や学びの多様化を推進する重要な役割を担っており、この取り組みを全市内に共有するには、一般校からあまりにもかけ離れたものではない。

また、今回コンセプトとして提案された内容は、学びの多様化学校だから大事にされることなく、名古屋市立学校の全てが今意識して取り組んでいる目標と同じである。

学びの多様化学校は一般校と何が違うのかと考えた際に、安心という点がとても大事になる。

そのため、教育課程を編成するなかで、一般校との違いを見いだしていけたらよいと感じるため、コンセプトとしては、一般校と同じこのような形でいいのではと感じる。

(村中委員)

最上位の目的に「安心して過ごせる」という表現を置かない方がよいのではないか。

それは当然安心して過ごせることが重要ではないという意味ではなく、むしろあまりにも重要な、図でも表されている通り基礎・基本の部分であると考えからだ。

対人支援や教育の領域において、安心感は非常に影響力が大きいですが、それは特に安心を感じられない場合に顕著である。それがなく非常に困難だが、満たされている時には考えることすらないようなことを、「登ったら消えるはしご」と表すことができる。安心以外にも居場所や、自分らしさなども同様。安心して過ごしている人は、安心について考えないし、自分らしく過ごしている人は、自分らしさについて思い悩まないといったことが挙げられる。大事だが、できているときには意識にも上がらないこと。

持論にはなるが、対人支援や教育において、「登ったら消えるはしご」を最終目的に置いてしまうと、結果的にそれができたか、できていなかったかがわかりにくくなったり、仮にできていたとしても、この先どこに向かうのか、達成できた後の指針が不明確になったりすると考える。

一方で、副題として掲げられている「楽しみながら挑戦し、自分の可能性を広げる」は、この内容を仮に実現できている学校であれば、基礎の部分たる安心して自分らしく過ごせているという点は達成できていると考える。逆に安心できない場所で、楽しみながら挑戦することはできない

め、その意味で最上位目的は「登ったら消えるはしご」ではないほうが良いと考える。

安心して大切にされていることを感じてもらった上で、子どもたちが通う学校には、どのような特色があるのか、他の学校にはない、この学校でないと体験できないことはいったい何かを考えていく必要がある。それをコンセプトに挙げるべきだと考える。

他市事例として挙げてもらった6校のコンセプトは、本当に苦慮して考えられたと思うので批判する意図は一切ないが、現状の学校に対してネガティブな感情を持っていたり、時にトラウマティックな反応になっている子どもたちへの配慮の部分が大きいように思う。

そんな中で、子どもたちにもう一度学校という場所で学んでもらおうと思った時には、草潤中学校のコンセプト「学校らしくない学校」のように、子どもたちが知っている学校とは違う学校であるというメッセージを伝えることが重要になってくるからだ。

「自分らしく」や「安心して過ごせる」という、今提供できていないことを提供するためのコンセプトとして言葉を選んでおり、もう一度学校で学んでもらうという点において、不登校特例時代からの流れを含めてコンセプトの出し方としては良いと思う。

しかし、学びの多様化学校をこれから作ろうという時に、これまでのコンセプトでよいのかは議論すべき点だと感じる。

学校らしくない学校、安心して過ごせる学校というのは、基礎となる前提の話であり、その土台の上に、10年20年経っても色褪せない、独自性と普遍性をもったコンセプトを作るために議論を重ねる必要がある。

(井上委員)

草潤中学設立時、前教育長よりコンセプトである「学校らしくない学校」を作るよう指示があった。

現状の学校は、多くの子どもたちを育てるには非常に優れた合理的な仕組みだが、その学校らしい仕組みに苦しんでいる子どもたちが、たくさんいるということも事実である。

既存の枠組みから外れた「学校らしくない学校」を作るにあたり、そのままスローガンとして打ち出すには、市民や親、子どもからの理解を得られない。そのため、サブテーマを設けることにし、30種類ぐらい考え、アドバイザーの先生に意見をもらった。その中の一つに、学校名の由来である中国の儒学者である荀子の言葉「内に輝くものがあれば、必ず外にあらわれる」をもとにした「磨けば君も必ず輝ける」が候補に挙がった。

アドバイザーの一人である京都大学の塩瀬先生からこの案を見て、意見をいただいたが、本当にハンマーで頭を殴られたような衝撃を受けたご指

摘があった。それは「磨かなければならない学校を作るのか。輝かなければならないのか。人生は長いのに、中学校の3年間で、子ども自身が大きく変化できて、ゴールに設定したような輝く姿を全員一律で目指すのか」と問われ、「学校らしくない学校」を作ろうと考えていたのに、すぐわないことに気付き、最終的には「ありのままの君を受け入れる新たな形」という言葉にたどり着いた。

子どもにがんばれがんばれと応援をしたり、もっと上を目指せると示すような学校ではなく、今の子ども自身をありのまま受け入れることを示した。

上の句「ありのままを受け入れる」は、草潤中学校だけではなく、すべての学校で苦しんでいる子ども、自立支援教室や適応指導教室といった支援を受けている子どもたちへのメッセージや、各学校の相談室・フリースペースと呼ばれるところにいる子どもたちの対応の一つのキーワードにもなるとも考えた。

名古屋市の場合、この学校がこうしていくよ、ということを表すと同時に、この学校が不登校支援の中核を担うのであれば、全ての不登校支援の対象となる子どもたちへのメッセージとして、名古屋市としての基本的な考え方を示すことができると感じた。

草潤中学校において、全国からの視察でよく質問されたが、「目指す姿はあるか」「卒業時に目指す姿はあるか」という質問に対し、「目指す子どもの姿は一つに考えてなく、設定してない」と回答している。一人一人が目指す姿は異なり、個々のペースで過ごすことを受け入れているため、卒業するまでに身に付けたい力などの設定はしていない。

したがって、名古屋市がどういった学校を目指していくのか、ということが現れるコンセプトになると良い。

(山村委員)

富士中学校としての居場所づくりを取り組み始めて3年目となる。自分自身多くの気づきを得た。

現場では、子どもたちの成長のための目標を設定し、その目標に向けていかに子どもたちを支援していけるかを考えている。居場所ができるときには、ここにいる子どもたちは通常のカリキュラムと異なり、この子なりの学びをみんなで認めて、温かく見守っていきましょうと、無理やり教室に戻ろうとか言わずにやろうと、手探りで始めた。

やはり子どもたちは、それぞれのペースでやっているが、成長したいと願う姿は、通常の教室で学んでいる子どもたちと変わらない。

安心を求めて、通常の教室とは違う場ではあるが、充電の場として捉えながら過ごす中で、自分で振り返った際に、自分自身に必要な力について

子ども自身で気づいている。居場所づくりは、子どもたちの気づきを大切にしたいと感じた。

学校という場において、お互いを高め合うなどの目標設定をしがちだが、こうした学びの多様化学校では、じっくり待つとあける、それぞれの気づきを大切にしていれば良いと感じる。

そういう点では、「楽しみながら挑戦し、自分の可能性を広げる」というサブテーマについて、それぞれなりの挑戦を大切にしていってほしいと思うし、可能性を高めるより、やはり広げる、というような子ども自身の気づきを大切にしていってほしい。

そうした待つ姿勢への意図が、保護者や子どもたちへ伝わるものであればよいと思う。

(武井委員)

学びの多様化学校というものが、不登校という現象に対応する中核的な存在であるとする、中核の意味を考えなくてはならない。

学校というのは、まず安心の場であるということが非常に重要であることは変わらない。

しかし、安心だけでよいのであれば教育は不要である。安心な場所であるのと同時に、子どもの成長を促していくということが公教育が存在する意義と考えるべきである。

そのため、一方に安心、他方に成長や挑戦という軸、そして一方に協働性、他方に個別性や一人一人の違いという軸がある。

理念のなかに、そうした反対同士の全ての軸が入っている。この場合、こういった機能を持つ学校となるかを考える必要がある。この学校で支援できる生徒は、全体の数パーセントしか学校に来ることができないことを加味すると、すべての子どもたちの安心の中核になれるわけではない。

中核という点で今後考えるべきは、アバター登校などの一定的なオンライン的要素である。

広大な不登校支援というエリアのうち、どこを取るかによって、その戦略は大きく異なってくるだろう。

安全安心できる居場所を謳うことも必要だが、この学校に来られる児童だけが安全安心といった形になっても仕方がない。

安全安心かつ他の人と一緒にいられる場所を作るということは逆に、中核的な機能を発揮しづらくなってしまいう可能性がある。またどういう意味で中核であるのか。ちゃんと考えておく必要がある。

安全安心というものは転移しにくく、挑戦というものは転移しやすい。同様に、協働は転移しにくく、個別性というものは転移しやすい。

例えば、多くの人が入れ替わり立ち替わり訪れるような環境は心理的安全性をとることが難しく、また特定のグループのみが非常に親密であると、いざ他の子どもが登校した際に輪に入るハードルが非常に高くなってしまう。

不登校支援をカバーするなかで、全体のフィールドの中のどの部分にどのような施設が位置づくのか、それを踏まえたうえでこの学校の理念を考えるべきではないか。まず理念ありきでスタートしてしまうと、ニーズに合った学校になるのか、という懸念を感じた。

(横井座長)

第二回会議にてコンセプトと視点、第三回会議にて対象となる範囲や学年について検討を予定している。ひとまず、第一回会議にてフェーズとして説明させていただいた、「家から出ることはできるが、在籍する学校に行くことができない」子どもを対象とし、議論させていただきたい。

(村中委員)

重要であることをすべて含めてしまうと、普遍的過ぎるものになってしまう。普遍的過ぎるコンセプトの何が難しいかというと、具体的な施策を考えるときに、そのコンセプトを参照にするにあたり指針の立案に繋がりにくいのではないか。

重要なところはすべて押さえた上で、立脚点を明確にするというのはとても大事である。

そう考えると、前回の会議で答えは出ているはずで、不登校施策の中核であり学びの多様化推進の中核という二つの円の重なり合うところに学びの多様化学校を打ち立てるべきであるため、これらが伝わるコンセプトを示すべきである。

こうした学校を作りたい、というクリアなメッセージとして伝わり、かつ実運用していくなかで、コンセプトに立ち返り、行動の取捨選択の基準となるような、具体性を持つものになる。

(武井委員)

不登校の子どもにとってまず何が大切かを考えると、精神的な安住つまり安心と安全となる。

安心と安全については、議論している学びの多様化学校だけでなくすべての居場所の基礎となる考え方である。

名古屋市の不登校施策の中核として、例えば安全安心を市内の各学校に波及効果を生むための、子どもの感情と社会性を育む教育活動となるソー

シャル・エモーショナル・ラーニングなどを行うのであれば可能だと考える。

ただし、名古屋市内の各所から通学できる時点で、この学校に通う子どもは、自分の行動の統率や状況を考えることができる状態である子どもであることが推測される。

そうした子どもたちを念頭に置くとき、安全安心の徹底追及した学校に留まるのではなく、通常校の学び方ではうまくマッチできない子どもたちへの多様な学び方を用意できるというのが、中核としてより期待出来ることではないか。

不登校施策のすべての中核となる学校になることは現実的ではなく、本来どの学校・居場所でも最優先すべきことと、中核として用意する機能とをきとっと分別した上で、この学びの多様化学校では、後者の機能についてより特化すべきと考える。

(入江委員)

安全安心と挑戦の繋がりが大事だと考える。

不登校の子どもたちの中には、みんなが安心して挑戦できる場合でも自分にとっては安心できない状況であったり、安全安心を感じる前に目指す目標などが提示されてしまいつらい状況の子どもたちもいる。

ひとりひとりの安全安心を確保しながら挑戦へと繋がるアプローチ・支援策をこの学びの多様化学校では充実できるかもしれない。

一般校では、皆で学ぶ教室空間と個別の居場所は、物理的な空間の作り方も大きく違ったり、集団の教育課程と個別の学習も学習特性に違いがある。その間を弾力的に行き来でき、ストレッチゾーンを広げることで、安全安心と挑戦が繋がっていく、そうした環境を作れることが学びの多様化学校ではないかと考える。

またこうした学びの多様化学校が中核となることで、市内の学校に、手法を共有したり教員の行き来によって横の繋がりができ、波及効果が生まれるのではないか。

安心と挑戦の繋がりを支えるために、学びの多様化がある、ということがメッセージとして伝わると良いと思う。

(武井委員)

不登校の子どもにとって、安全安心が必要であるという認識は変わらないが、学びの多様化学校が、安心だけを求めるだけの学校になってしまうとよくない。

不安な子どもは全てこの学校に来たいが、来ることはできない。また、他の学校や居場所では、この学校ほど高いレベルの安心を与えられないため、子どもが不安になるといったことに繋がるのではないか。

不登校施策の中核として、安全安心のみならず、普通の学校の学びではできないが、個別最適化された学びならできる子どもや、普通の学校の集団生活には馴染まないが、もっと別の多様な協働だったら得意だという子どももいるはず。

そういった子どもを対象とするかを考えておかないと、すべての不登校の子どもに必要なことを行う学校になってしまうと意義がぼやけてしまう。

不登校の子どもへの支援すべてを包括することはできないため、ピンポイントで機能を特化しておくことが必要となる。

どこの学校でも必要とされる安全安心を、この学びの多様化学校では高度なレベルで確保するとしてしまうと、学びの多様化学校へ通えない子どもへの格差が生まれてしまうことを危惧している。

(横井座長)

委員の皆様から「安心安全」、「挑戦」、「成長」、「不登校施策と学びの多様化の交わり」、「安全安心と挑戦のつながり」、が大切だというご意見をいただいたので、再度コンセプトを検討することが必要だと感じている。

(2) 目指す学校の姿の実現に向けた学校づくりの視点（機能）

■事務局からの説明…資料を基に説明

■委員からのご質問・ご意見

(尾関委員)

「まざる」という点について、学びの多様化学校へ来る子どもたちは苦手とする子どもが多いと考える。

ただ「まざる」というのは、一般校のような同学年の子ども・教員のみ限定されるものではなく、地域の人にも置き換えることができるのではないか。

星槎名古屋中学校でグランドゴルフ大会が行われた際に、所属する生徒が10名程度、教員や保護者も一緒に参加してくれた。地域の年配の方に混ざりプレイをしながら、ホールが進むごとにナイスとか上手だねなどの声掛けに対して、笑顔を見せるようになってきた。最後の方では、スティックやボールなどを使いふざけたりして、中学生らしい姿も見ることが出来た。

地域の行事は土日の実施がやはり多い。その中で教員も生徒と一緒に参加できる機会があるととても良いのではないかな。

教員の働き方改革が叫ばれているなかで、土日の対応を示すのも難しいのはわかってはいるが、この学校に赴任する教員には意識をしてほしいし、それに見合う待遇や給与なども考えてもらえると良いのではないかな。「まざる」を大切にしていけたら良いと思う。

(森委員)

学びの多様化学校というのは、さきほども他の委員から意見が出ているように、不登校施策と学びの多様化の重なるところだと考えると、「ききあう」「まざる」は社会性、「きめる」「ひたる」が多様な学びに関わることだと感じた。そう考えると、名古屋市の学びの多様化学校のコンセプトからすると、この4つのエッセンスは良いものだと思う。

他市を例にみると、京都市立洛風中学のコンセプト「新たなかたちの学びと育ちの場となる学校」というのが、まさしく社会性と学びの両立としてマッチしていると感じる。

(武井委員)

都市型と田舎型では、学校が保有する機能が異なっている。

例として、京都市立洛風中学校や岐阜市立草潤中学校は、駅の近くや街中の設置となるため都市型と呼べる。ここでは、E d T e c h（エドテック。テクノロジーを用いて教育を支援する仕組みやサービス）であるとか、個別最適化された学び、教育課程での探究的な要素が強く入ってきている。

白石市立白石南小学校・中学校や玖珠町立くす若草小中学校は、居場所的な機能がやはり強い。

不登校全体のどこの層を対象とするのか、またその学校に期待されている他の学校への影響なども、大きく異なるだろう。

名古屋市を都市型と想定すると、そうした中で、この学びの多様化学校へ通っていない子どもたちが、所属校へ何らかの理由で登校できなかった、学んだりできなかった時に、オンラインで学びの多様化学校へ参加することで、所属校での出席扱いや出席そのものにできるのではないかな。そうしたプログラムをある程度用意しておいた方がよく、またオンライン出席などに力点を置いた学校作りを考えて置く必要がある。

所属校で不登校状態かつ他の居場所を確保できた状態で、学習したい子どもたちへの教育支援は、教育支援センターの指導員から個別に教えられただけでは不十分だという場合に、活用できるような教育のあり方に力点を置くべきではないかなと思う。

(村中委員)

不登校施策と学びの多様化推進施策の二つの円が重なる部分に存在するコンセプト。ここに掲げられている施策が、そのコンセプトと照らし合わせた際に、もっと踏み込んで考えるべき点がいくつかあると感じた。

学びの多様化について、具体的に述べると「個別最適化」が推進されることである。個別最適化とは何かというと、子ども自身が選択できる余地が豊かにあることを指す。

例えば、登校時間を一般校より遅めに設定する、というのは必要なことに変わりないが、全員一律一斉であるべきなのか、全員が同じ時間に登校すべきか、もう一步踏み込んで、子どもが自分で登校時間を選択できるところまで考えるべきではないか。

他にも総授業時間数の削減・減少も全員一律に行うべきなのか。もっと学びたい子どもも授業時間数は削減されてしまうのか。

施策を全員一律に動かすという発想から、もう一步二歩と進めていく必要がある。子どもたちへ選択権のある選択肢をどれだけ増やせるか、そうした大人側のチャレンジがとても大事ではないか。

また「まざる」に、インクルーシブ教育についての言葉が出てきておらず、今後の重要なこととして考えていく必要がある。

今回の支援の対象のなかに、特別支援教育の対象になる子どもや外国にルーツのある子どもなどは含まれないのか。地域の人と「まざる」ことも大切だが、学校にいる仲間の多様なあり方と「まざって」いくことがどこまでできるのか。

そうした学びの多様化、つまり個別最適化が進めば進むほど、特別な教育を必要とする子どもの数は減るのではというのが持論。今、特別支援教育の対象となる子どもをインクルーシブできる学校とすることは、十分可能だと思っている。そういう意味でもう一步二歩、進んで議論ができると良い。

(山村委員)

現場目線で、個別最適化の教育・協働的な学びについて、現状は学級単位や学級の中のグループという形で実施しているものを、この学校では、協働的な学びのグルーピングをより2名～3名といった少人数や、10名程度など、個々の状況に応じて、既存の枠とは異なるオーダーメイドにしていくことが必要ではないか。

教員配置にも関わってくるが、現在の中学校は35人または40人学級という枠に縛られてしまう。そのなかで1,015時間の授業数をこなさなければならないなかで、工夫しているが限界を感じる場面はある。

居場所づくりのなかでも、人のやりくりには限界があるため、この学校では、個々に応じたオーダーメイドの教育活動がされると良い。その取組が学校現場と共有されるときに、どこまで現場が迫っていけるのか。教育制度の条件整備まで話が上るとよいと思う。

(入江委員)

安心と挑戦、個別と協働という軸が、4つの機能それぞれのなかに十分意識して組み込まれることは重要である。

例として「ききあう」でいうと、まず聞く前に、自分の考えをまとめることや表現することが難しい子どもや、聞いてもらったことがない子どもの場合には、カウンセリングや個別に話を聞く場を設けることが大事になる。また、自分の考えをまとめたり表現することはできるが、人と対話することが難しい段階の子どももいる。例えば高尾山学園では、授業の中で思考判断表現を重視した学びにおいても、グループで話し合うのではなく、まず自分で書くとか、タブレットに向けて話してみるといった方法を設けている場合もある。そうした時間に加えソーシャルスキルプログラムを重ねていき、「ききあう」ということができるようになることもある。一つの機能の中に「安心」「挑戦」「個別」「協働」がしっかりと入り、それらがつながっていくような、プログラムが必要だと感じる。

「きめる」についても、全員の教育課程の中に個別学習の時間を設定して、そこで自由に学習していくのか、高尾山学園のようにコース別にして、自由進度学習と通常の教育課程をコースで選択するようなやり方もあると思う。

いずれの形においても、子どもの段階に応じて、生徒自身が決定できる選択肢があるという作り方をしていくことが、学びの多様化において重要である。

総授業時間数についても、一部オプションにするのか、全て教育課程に入れるのか検討する必要がある、また子どもによって選べるのもよいだろう。

どういった活動をするにあたっても、安心と挑戦が段階的にプログラムが組み立てられ、生徒自身で選ぶことができることが重要である。

(井上委員)

「幸せに過ごせる学校」などコンセプトだけでは漠然としており、そうなるために必要な具体的な4つの学校づくりの視点（機能）「ききあう」「きめる」「まざる」「ひたる」で示された行動をすることで、自分らしくいられて幸せに過ごせる学校になるというわかりやすさがある。

岐阜市立草潤中学校もコンセプトを具体的にする5つの基本的な方針を示している。

少しイメージしにくいと感じたことは、「ききあう」の項で、対話を大事にするということに相違はないが、対話を通してや対話の時間の設定とあるが、それがどういう時間でどんなふうに進められるのか具体性がないため、イメージしにくいと感じた。

「きめる」の項で、自分のペースで学ぶ、学び直しや学びの深化とあるが、「あんしん」の項で出ている自習室や図書室でも学べますよ、というような、自分のペースだけではなく、自分で学ぶ場所や学び方を選べるという示し方も必要ではないかと感じた。

進路指導について全体で触れているが、4つの学校づくりの視点（機能）の中に出てきていない。実現するための具体的な方法や例えばこう考えているみたいなものを示していった方がよいと感じた。

（武井委員）

4つの学校づくりの視点について考えていくことで学校の姿は明瞭化していくだろう。

4つの学校づくりの視点（機能）「ききあう」「きめる」「まざる」「ひたる」は、それぞれに多様性を含んでいる。

「ききあう」一つとっても、人の言うことを理解することと、ASD（自閉スペクトラム症）の子どもが苦手とすることと、背後にある感情や思考を読み取ること、とは異質である。

「まざる」の項について、従来校のように所属の中で円滑にコミュニケーションを取るスキルと、自分の興味関心に応じて関係の薄かった人とコミュニケーションをとるスキルとでは、大きく異なる。

「きめる」の項について、いくつかの選択肢の中からメニューを選ぶように決めていく決め方と、自分自身で目標を設定し自分の行動を選択する決め方とでは大きく異なる。

「ひたる」の項について、特定のテーマについて没頭するのか、拡散的に俯瞰して様々なテーマについて没頭するのか、でも大きく異なる。

4つの学校づくりの視点（機能）は学びの多様化学校への議論の軸としてはとてもよく、今後も議論を重ねていきたい。

教育課程の在り方について、学校絵ある以上、最低基準は設けなくてはならない。最低実施する授業時間数を決め、そこに加算する形で、各自の進度や興味関心に応じて学ぶ、ということができよう。

もう一つ、ぜひ考えてもらいたいのが、「NHK for School」、「STEAMライブラリー」といった質の高い教育コンテンツがあるが、これはいつどの時間でも聞くことができる。これを家庭等で聞いてきたことを学習の時間に

	含めたり、聞いてきたことを前提で授業を実施したりすることで、授業時間の最低基準をさらに緩やかにできるのではないかな。 オンライン教材の活用により、子ども自身が時間を設定し学ぶことと、オンライン教材による学習を行いながら対面またはオンラインでの対話ができるハイブリッド型を用意していくことで、学びの多様化学校に在籍する子ども以外の子どもにも、相当メリットがある。 (村中委員) 2つのフレームと4つの学校づくりの視点(機能)の考え方はとても良いと感じる。 コンセプトをより具体化するキーワードとして「ききあう」「きめる」「まざる」「ひたる」があり、具体的な施策(取り組み)として落とし込んでいく中で、どこまで攻められるのか、どこまで新しいことができるのかのチャレンジだと思う。 「きめる」項について、個人的に関心が強い。いつ・どこで・だれと・なにを・どのように学ぶのか。これを子ども自身が決めることができ、どれだけ子どもたちの手に持たせることができるのか、チャレンジしていく必要がある。 インクルーシブ教育・特別支援教育についても触れたが、名古屋市だけの話ではないが、単元内自由進度の単元内の枠を外し、完全自由進度にならないかと思っている。 理由として、息子がホームスクーリングで自立した学びをしているなかで、興味関心のある理科は中学の教育課程を学んでいるが、算数は所属する学年よりも下のものを復習している。 その状態が、息子にとってよい負荷でありコンフォートゾーンとチャレンジゾーンの両立になっている。 もしその学びが5年生の単元内に限られていた場合、ちょうどよい負荷の学びができなくなってしまう。つまり、現状の単元内自由進度の縛られる全ての学校に、息子が合わないということになってしまっている。 国を動かす勢いのチャレンジにより、さらに豊かな選択肢と個別最適化された学びができるのではないかと考える。 今あるリソースをいかに活用し、最もよく効率化していくことが大切である。例えば、一斉授業的な知識を伝達するような場合には、教員が直接授業をしない仕組みを取り入れていけばよいし、逆にリアルタイムでないとできないような語りや学びの深化など、必要な場面に先生のリソースを割いていく、といった新しい形をこの学校で実現できたらと良い。
その他	【次回開催】 ・日程 令和7年1月20日(月) 14:00～

	・場所 名古屋市教育館 第1・2・3研修室を予定
--	--